

『伝統文化の継承・再興』

商学部 マーケティング学科 2年 高良光

(CM23-1271D)

はじめに

まずは私について少しだけ紹介する。私は殺陣・和太鼓・日本舞踊を中心に長い間日本の伝統文化について触れてきた。そんな私はこれらの活動を通して日本にある素晴らしさを海外へそして日本へと広めたいと感じ、これからの生涯をかけて日本の伝統文化やあらゆる日本に関連したものをビジネスと掛け合わせて展開することでお祭りや伝統文化などの縮小していつている行事を守り、広めたいと考えている。私がなぜこの活動をやろうと思ったのか。私がこの活動を通して何を伝えたいのか、なぜビジネスと掛け合わせようと思ったのかについてこれより述べていきたいと思う。

和太鼓・殺陣・日本舞踊を始めたきっかけとそれから

まずは私が和太鼓を始めたきっかけについて述べていく。私の小学校では毎年学習発表会（学芸会）という行事において小学校6年生が全員で和太鼓を演奏する伝統があった。当時1年生の頃の私は6年生の演奏を聞いた時、心臓に響き渡るような音の圧力と自分には出せない表現力に感動し憧れを持った。そこから私は和太鼓に対して興味を持ち始め、気づけば和太鼓を始めていた。それから5年間の間、地域のお祭りや老人ホーム、地元では名の知られている大きなお寺などで和太鼓を演奏していくことで技術を高めていった。この5年間で私の師匠が病にかかり約30年ほど続いたチームは解散することになり、残った数人のメンバーで新しいチームとして和太鼓を続けていくという出来事があった。それを乗り越え6年生となった私はいよいよ憧れていた行事を行う学年となった。私が所属していたチームでは演奏をする際に多くても十人ちょっとくらいといった人数での演奏が基本であったが、学校行事での和太鼓演奏は学年全員での演奏であったため総勢100人ほどの人数で演奏をした。多くの人数が同時に叩くことで発生する音の圧力というものはものすごく迫力があり、演奏する側も鳥肌が立つほどであった。

和太鼓は「ドン」という音と「カ」という音の2音のみ（厳密に言えば強弱や叩き方で音は変わるが）からなるため、曲を覚えれば誰でも音を出すことが可能な楽器である。こうした理由から、曲を覚えた子から覚えられていない子に対してアドバイスをしたり、覚えた子同士はさらに良い演奏となるようにお互いを高め合うことができていた。このことは和太鼓ならではのことであったと私は感じている。そして、私の憧れていた行事は幕を閉じ、この行事については今でも小学校時代の友人たちと会ったら必ず話題に出てくるほど印象深い思い出となった。

私と共に和太鼓を習ってきた友人たちは中学校に入ると同時に引退していった。しかし私は中学校の3年間までは和太鼓を続けていった。高校以降からは忙しくなったことで毎週練習することは出来なくなりほとんど練習をしなくなったが、地元のお祭りやイベントなどの依頼をいただいた時には、本番一月前にはメンバーを集めて練習し、なんとか続けているという形になった。

殺陣を始めたきっかけは昔に俳優、スタントマンとして活動していた父がハリウッド映画「ラストサムライ」の撮影のためにニュージーランドへ行った時、日本全国の殺陣の流派が集められ、リアルな殺陣から戦隊ヒーローのような殺陣など様々なものを見てきた中で映画やドラマで使うことに特化した、映像に映える殺陣を広めたいという思いで開講した殺陣・アクションチームがあったことが背景にあり、幼い頃からその教室に学びにくる人たちと共に私は練習を行っていた。

日本舞踊は私が高校一年生の2月頃、当時入っていたバスケット部を辞め、俳優やエンターテインメントの業界に興味を持ち始めたことをきっかけに父の紹介により始めた。日本舞踊の家元（師匠）には1週間に二度ほど稽古をつけていただいたが出会って約2年と半年ほどの時に亡くなった。この2年間はあっという間であったが、様々な作法の話や昔の日本の話、家元が感じている現在の伝統文化についてなどを聞くことができ、非常に深い時間であった。現在は家元の元で40年間ほど門下生として学んでいた方の一人が新たな家元となり、私はその方の元で学ばせていただいている。

伝統文化の衰退

ここまで述べてきたように私は殺陣、和太鼓、日本舞踊をやっていることからお祭りやイベント等で演奏、公演をする機会が多くあった。小学校1年生から現在大学2年生になるまで多くのイベントごとを主催者側として、そしてお客さんとしての視点から見てきたことで近年お祭りが縮小、減少傾向にあるように感じてきた。

地元のお祭りの例を挙げるとしよう。5、6年前はそのお祭りでは開催日の2日間のためだけに2週間ほどの時間をかけて櫓を建てていたが、最近では経費削減のために櫓を建てることを取りやめた。他にはお祭り自体が騒音によって廃止、お祭り時間の短縮がされたり、海外の音楽が日本で流行することによってお祭りの西洋化が進んでいっていることがある。少し哲学的に言うならば、お祭りがお祭りではなくフェスティバル化していっているのだ。もちろん、時代が変わるにつれて伝統やしきたりが変化していくことは良いことだと思う。しかし、お祭りの例からわかるようにもはや変化ではなく気づきづらいところで日本が持つ伝統文化は失われつつあるのだ。

私が和太鼓を始めるきっかけとなった小学校の学習発表会での和太鼓演奏も今年の行事で最後になることを聞いた。この言葉を聞き、私はとてもショックを受けた。行事がなくなる理由は和太鼓を練習する際の音が大きいことによる地域からのクレームがあったことであり、学校長が変わったことで方針が変わり、伝統を守るより、クレームがくるならば和太鼓演奏は廃止しようということだった。和太鼓演奏がなくなることについては多くの保護者の方からは反対意見が出ているらしい。もちろん私も反対である。

私的には伝統がなくなってしまうことが悲しいと言う気持ちもあるが、一番残念だと感じる理由は子供たちに全員が団結して奏でる音の迫力を体感してもらい、仲間と協力することによって力が何倍にも膨れ上がることを知ってほしいという気持ちがあるからだ。

また、殺陣をやっていることから映像関係の仕事をする機会があり、映画関係者の方のお話などを聞いた時「最近は時代劇をやらなくなったな」「時代劇にお金がかかれなくなっている」「昔はあんなにたくさん時代劇があったのに」「作法や衣装の着方があっていない」などの話を耳にしてきたことから伝統が衰退傾向に感じられた。

日本舞踊の家元が生前の際、私と稽古前や稽古終わりにこれから先日本がどんな国になっていくのか、日本舞踊の会は存続していくのかを話したり、私と家元で夢を語り合ったりした。夢の内容としては殺陣、和太鼓、日本舞踊、そしてあらゆる日本文化を融合した舞台を作り、見ている人たちを楽しませたいといったものであった。この夢は私の夢でもあり先生の夢でもあるため将来にかけて実現のために尽力したいと思っている。

こうした様々な体験をして伝統文化の衰退を感じ、夢を語ったからには叶えられるように努力しなくてはならないという気持ちや先生の夢を継ぐこと、伝統を守ることは幼い頃から伝統文化に触れてきた自分の役目だと感じた責任感から伝統文化を広げ、守っていききたいと私は思い始めたのである。

伝統文化の衰退理由と課題

伝統文化の衰退理由と課題について、私が体験してきたことから考えてみる。まず、伝統文化には敷居が高く、厳かなイメージがあることで始めようと思う人が少ないということが考えられるだろう。日本舞踊を習う場合、基本的には門下生にならなければいけない。そして、活動のためには着物や扇子の用意が必要である。発表会に参加する際には、会場代、衣装代、出演料、人件費など総額30～50万円になることもある。私が通っている流派ではそこまでお金がかかることはないが、現在でも昔のしきたりがあるような教室（流派）では金銭的にも雰囲気的にも敷居が高く、窮屈なものだと感じる人が多くいるように感じる。現に私でさえ、日本舞踊だけでなく和太鼓、殺陣でも正座から礼で始まり礼に終わる挨拶をすることは厳かな雰囲気がとてもあるように感じ、参入の障壁となっているように感じることもある。また、物珍しさから敷居が高いと思う人も少なくないが実際はそこまで敷居が高くはないためイメージを変えていくことが必要だと感じている。

もう一つは、古くて窮屈なものだと感じることはないかと思う。伝統文化とは文字通り世代を超えて受け継がれてきたその国や地域を特徴づける文化という意味である。人々は新しいものを好む傾向があるため、古いものに興味が湧かないという感覚があるのではないかと感じる。そのため、私は古さを感じさせないための仕組みを伝統文化に反映させることが必要だと感じている。

そして、伝統文化が衰退傾向にある1番の理由は必ず、収益と結び付けられていないことだと思う。私が見てきた中ではイベントやお祭りなどの舞台に呼ばれて演奏をしたとしても、せいぜい貰える金額は数万円であった。数万円であると、そこまでに楽器を運ぶための交通費や楽器修繕費、人件費などを差し引くと赤字になってしまう。そして、文化的な活動をする上では利益を求めてはいけないという暗黙の了解があるようにも感じる。実際、私が所属するチームも舞台のチケット収益などを災害地復興支援金や障害者支援金といずれも慈善活動を行なっている。慈善活動は素晴らしいことであり、大切な活動であると思う一方、利益を出さずに伝統文化を存続させることは非常に難しいことである。

利益を上げ、その利益を効率的に活用することが出来れば、伝統に携わる活動を生業にできるだろう。そうなれば、趣味や慈善活動ではできないレベルで資金を動かせるようになることでより高い次元で伝統文化を守ることができるだろう。多額の資金を動かすことが可能ならば広報活動の実施や伝統に関するモノやサービスを作ることができるため、さらに伝統

文化を広めることが可能になる。こうした理由から私は伝統文化とビジネスを結びつける必要があると強く感じている。

現在行っている活動

次は、伝統文化を広めるために私が現在行なっている活動について述べていく。上記「伝統文化の衰退」にて私が和太鼓を始めるきっかけとなった和太鼓演奏がなくなることを述べたがこの話題を聞いた出来事の詳細について述べたいと思う。

時は、2023年11月～翌年2月まで勤めたバイト先（カフェ）での話である。11月より勤務を開始した私は中学校時代のバスケ部の後輩のお母さんと勤務先が重なっていたことを知る。それから3ヶ月後、勤務先が閉店することになったのだ。そして、従業員たちで閉店のための片付けをすることとなり、閉店作業をしているときに次は何の仕事をするかという話題になった。私はこの仕事を和太鼓教室を始めるための資金集めを目的として働いていたため、「和太鼓の教室を自分で立ち上げてそれを仕事にしたい」と言った。

私がこの発言をした時に後輩のお母さんから今年度（令和6年度）で小学校の和太鼓演奏がなくなることを聞いたのである。この発言とともに、子供の演奏が見たかった親の話や後輩の弟が和太鼓に興味があること、これからの学校行事についてなどを聞いた。こうして、地域の伝統を守れるのは自分かもしれないという使命感が湧いた私は和太鼓教室を今年中には絶対に作ろうと心に決め、2024年3月から本格的に動き始め、現在では10歳～65歳の幅広い年代の生徒8人の師匠として活動している。

和太鼓教室を始めることとした理由はチームが解散する際、和太鼓を新しく揃えていたり、私が伝統文化をどうにかして広めたいと考えていた時にチーム解散後から音信不通になっていた師匠から連絡が来た際に「使わない太鼓が数台あるけど、和太鼓をやりたいなら全部やるよ」といって下さり、断る理由もなかった私は「全部ください」と言ったことで和太鼓を合計で4台ほどいただき、商売をするための道具にはほとんど困る事がなくスタートができると思ったからである。和太鼓さえあれば教室を開く際に必要なものは開催する稽古場と和太鼓を搬入する際に必要になる車、講師、生徒を集めることであった。

和太鼓はとても大きな音が出るため、防音設備が整っていない場所では音を出すことが出来ない。そのため、防音設備がある施設を探した。しかし、見つからなかった。そのため、現在は防音カバーを被せたり、遅い時間には高い音の出る楽器を使わないなどの努力をしている。しかし、カバーをかけての練習では本来の音を聞くことが出来ないため、いずれは防音の施設で練習をしたいと思っている。幸いなことに、現在お借りしている施設から、空いているスペースがあれば和太鼓を置いても良いという許可をいただいたため、練習の際に車で搬入する作業や倉庫などの維持費がほぼかからずに済んでいる。

生徒を集めるためにはホームページ、チラシでの集客をする必要があると思い、ホームページの作成、チラシの作成と配り作業を行なった。ホームページ作りは一から勉強する必要があったためとても時間と労力がかかり大変であったが作ってみたことで良い経験になった。チラシの作成もいくつかの本を読んだり、ネットで検索しどのようなデザインにすれば集客力が高まるのかなどを考えたり、大学のアンケートで頻繁にGoogleフォームを使っていたことからアイデアを得て、2次元コードをチラシに記載することで即時に体験受付に繋がるようにするなど、模索しながら作成した。チラシは一人で配るにはあまりにも多すぎたため、友人の助けを借りて約5000枚のチラシを地域の住宅へ配布した。

講師は私が務めれば問題はないだろうと思ったものの、自分が思っているほど自分の実力は高くはないのではと考えたことや、より上を目指しながら教育活動をしていけば自分はさらに成長できるのではないかという気持ちから、プロの方が密接に関わり、海外公演などの経験がある実力があるチームへと入団し、現在はそちらのチームに所属しながら活動を行っている。ちなみにそのチームのお頭は私の師匠の弟子、つまり私の遠く離れた兄弟子に当たる人物が創設したチームであり、とても縁があるように感じる。

今年の8月にはそのチームの活動で、プロ和太鼓奏者の林英哲さんが総司会を務める行政が関わるプロジェクトに参加した。活動内容としては沖縄県北大東島の和太鼓チーム、北曙会（ほくしょかい）の小学生～大学生の子供達と私が所属する和太鼓チームとの交流会を通し、お互いの伝統的な和太鼓を演奏し合っ互いを知るというものであった。お互いの叩き方やリズムの違いなどから伝統を知ることができ、それぞれの生まれた場所や住んでいる地域についての興味が湧くことで、話し合いが進み、すぐにみんなが仲良くなっていった。この活動を通して、伝統文化を学ぶことは人を繋げる一つの方法になるのではないかと感じた。

また、現在は将来の事業拡大に向けてお金の効率的な運用の仕方や将来必要になるであろう簿記、英語、作曲、ビジネスにおける知識などを勉強している。

苦勞したこと

私が上記の活動を行う上で最も苦勞した点は、新たなことを始めることでも、辛い練習をして自分の技術を高めることでも5000枚のチラシを炎天下の中で配り続けたことでもなかった。もちろん、新たなことに挑戦するためにはたくさん学ぶ時間や作成する時間などがかかることはきつく、チラシ配りも肉体的にかなり大変だと感じた。しかし、最も苦勞した点は本当に自分にできるのだろうかと感じたり、夢と現実との乖離を感じることで活動を続けていこうという熱量を持ち続けることが大変だったことである。特に、初めはやるのが明確に定まらないため、何かをしたいという考えや熱はあっても何をしたいのかわからないことが本当に苦痛であった。しかし、何度も何度も考えては壁にぶつかっていくことで少しずつその壁の上を登ろうと必要なことを書き出していき、書き出したことを埋めていくことで活動が少しずつ進んでることを実感することが出来たため、なんとか乗り越えることができた。

これからの活動

伝統文化を広めると言っても資金がない状況では何も出来ないため、スモールスタートが可能であるYouTube、instagrm、tiktokやブログ作成を同時に行うことで様々な媒体からの発信を日本語のみでなく英語を用いて世界に発信し、多くの方が伝統文化に興味を持ってもらえるよう努力していきたいと考えている。加えて、将来展開しようとしている伝統文化関連の活動を行うためには想像を遥かに超えるような資金が必要になるだろうと想定しているため、伝統文化に関する活動や事業だけでなく、金融、不動産、流通業など様々な事業が展開できるようにビジネスの知識をつけながら、資金集めをしていこうとも考えている。現在、和太鼓教室で徴収しているお金は全額、教室やその他の事業を行う際の資金として使用しているため、自分への報酬を一銭も出さずに行なっている。この状況では、日本舞踊や和

太鼓の会費を払うためのお金も貯金から崩さなくてはならなくなり、私生活に影響が出てきたため、今後はバイトとの両立も図ろうと考えている。

そして、今開いている和太鼓教室の生徒をしっかりと成長させられるようにそれぞれにあった指導方法を模索したり、地域のホールを借りて公演を開催したり、地域、企業、学校に話を通して本番の機会を得られるように動いていながら、教室集客のために作成したチラシやウェブサイトをもう一度見直し、より集客効果を向上させられるようにデザイン変更や修正を検討していきたい。

10月は土日祝日のほぼ全てに私自身が出演する公演やイベントがあり、同じく10月には教室の生徒が出演する本番もある。そして、11月には秋葉原UDXにて大規模な和太鼓・殺陣・日本舞踊を混ぜた舞台があるため全力で取り組みたいと思う。

まとめ

3月から現在、10月の間までに何とか和太鼓教室を構築することができ、夏祭や地域のイベントで演奏することが可能なくらいの人数を集めることができた。しかし、まだまだチームの実力は未熟なため、指導者として責任を持って皆を育成しなければいけないと思っている。自分もまた、実力の磨きをかけなければならないことが多くあるため、日々努力を続けていく。この活動には多くの苦勞が伴ったが、特に夢と現実のギャップを感じながらも、少しずつ前進することができてきた。これからも伝統文化を広めるために努力し続け、資金集めやビジネススキルの向上に努めながら、最終的には多くの人々に日本の伝統文化の素晴らしさを体験してもらいたいと願っている。

そして、ここまで活動を進めることが出来たのは、自分とともに活動を手伝ってくれる友人や私の活動を応援してくれている方々の協力があったのこのため、伝統文化を広げる活動と事業を成功させ、様々な人たちに一刻も早く恩返しができるように日々、日本の伝統文化が再興する日を夢見ながら全力で活動に挑んでいきたい。

●殺陣・和太鼓を合わせたパフォーマンスの写真



●日本舞踊の舞台



●和太鼓教室の練習

